

# 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、園舎新築工事に伴う常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

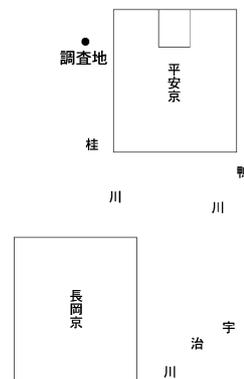
平成 22 年 8 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦東蜂岡町5他
- 3 委 託 者 学校法人 美乃里学園 理事長 北村隆信
- 4 調査期間 2010年5月6日～2010年6月22日
- 5 調査面積 1区：約340㎡ 2区：約60㎡
- 6 調査担当者 加納敬二
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 加納敬二、竜子正彦（自然遺物）
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 協力者 調査時には、西山良平氏（京都大学教授）、片平博文氏（立命館大学教授）から御教示をいただいた。また、整理時には、平尾政幸氏（古代の土器研究会）から土器について御教示を得た。



(調査地点図)

0 2 4km

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	6
(1) 1区の遺構	6
(2) 2区の遺構	13
4. 遺 物	14
(1) 1区出土土器	15
(2) 2区出土土器	20
(3) 瓦類	22
(4) その他の遺物	23
(5) 自然遺物	24
5. ま と め	27

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（西から）
		2	1区土坑189（東から）
図版2	遺構	1	1区土坑183（西から）
		2	1区土坑183堆積状況（南から）
図版3	遺構	1	2区全景（東から）
		2	2区土坑25（南から）
		3	2区柵36（北から）
図版4	遺物		1区土坑183出土土器
図版5	遺物		1区土坑183・189・197・集石73出土土器
図版6	遺物		1区土坑208・211・218・224出土土器
図版7	遺物		2区土坑13・22・25出土土器、金属製品、石製品
図版8	遺物		軒瓦

# 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景	3
図4	現地公開風景	3
図5	調査地と周辺の遺跡（1：5,000）	4
図6	1区遺構平面図（1：150）	7
図7	1区北壁・西壁断面図（1：100）	8
図8	1区溝2、集石73、土坑8・183・188・189実測図（1：40）	9
図9	1区柱列1実測図（1：40）	10
図10	1区柱列2実測図（1：40）	11
図11	2区遺構実測図（1：100）	12
図12	2区土坑25実測図（1：40）	13
図13	2区柵36実測図（1：40）	13
図14	1区出土土器実測図1（1：4）	16
図15	1区出土土器実測図2（1：4）	18
図16	1区出土土器実測図3（1：4）	19
図17	2区出土土器実測図（1：4）	21
図18	軒瓦拓影・実測図（1：4）	23
図19	金属製品・石製品実測図（1：4）	24
図20	種実	24
図21	炭化材1	25
図22	炭化材2	26
図23	周辺調査と遺構概略図（1：500）	28

# 表 目 次

表1	周辺調査一覧表	5
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	14
表4	炭化材・種実リスト	27

# 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

## 1. 調査経過

自然幼稚園新築工事に伴い、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という。）の試掘調査によって平安時代の柱穴、土坑などの遺構が見つかったため、発掘調査を実施した。調査地は古墳時代から江戸時代にかけての遺構が重複する常盤仲之町遺跡の南東部に該当するとともに、広隆寺の旧境内にも該当し、現在の主要伽藍の東に位置している。

今回の調査は、広隆寺寺域の北東部の様子を明らかにすること、ならびに古墳時代から江戸時代にかけての遺構の検出を目的とした。調査区は、敷地の北東部に1区（約340㎡）、さらにその西側に2区（約60㎡）を設定した。調査は2010年5月6日から開始し、同年6月22日に終了した。

調査の結果、平安時代中期の遺物が多量に投棄された土坑群を重複した状態で検出した。土坑からの出土遺物には、多量の土師器皿や仏具とみられる緑釉陶器の花瓶・三足火舎・壺などとともに、輸入陶磁器の白磁や青磁と二彩陶器なども含まれていた。これらの遺物は、近辺で行われた宗教儀式で使用された可能性がある。また、広隆寺の子院の存在を窺わせる北と西を限る区画溝や柵などの遺構も検出した。

なお、調査期間中においては、市文化財保護課から5月6日、5月13日、5月18日、5月21日、6月4日の計5回、現場指導を受けた。また6月19日には自然幼稚園卒園者、父兄などを対象とした現地説明会と発掘体験（参加者約40名）を行い、調査成果の公表、資料の活用に努めた。

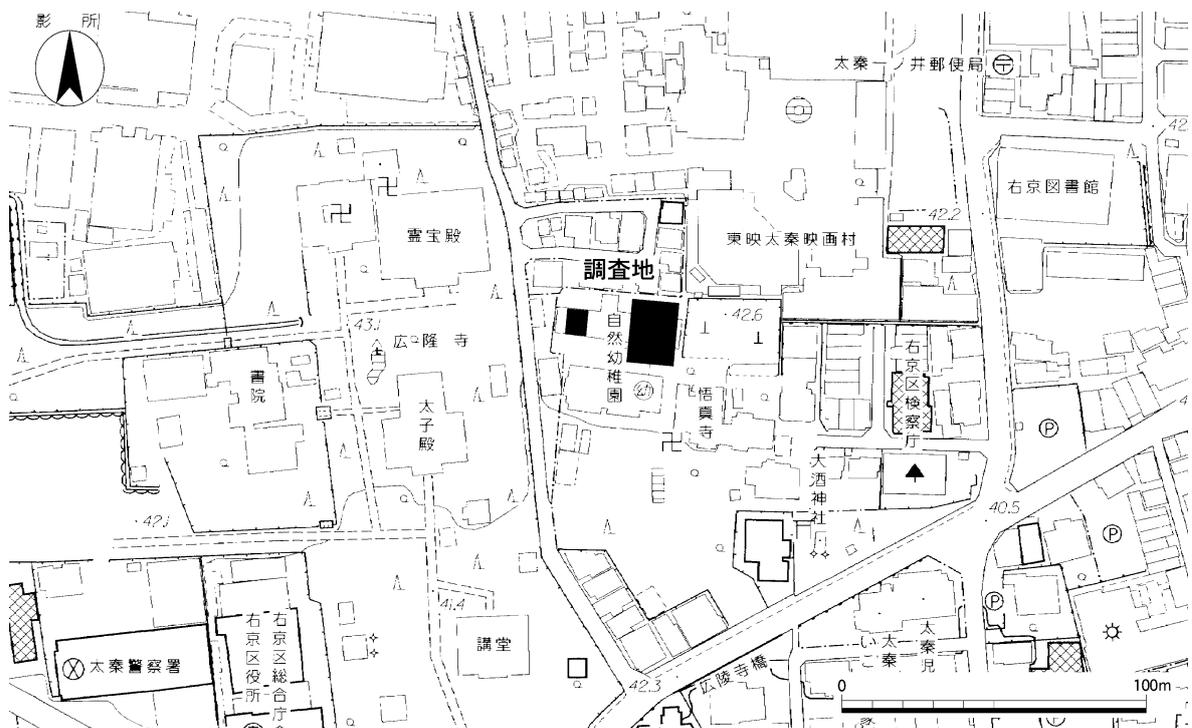


図1 調査位置図（1：2,500）

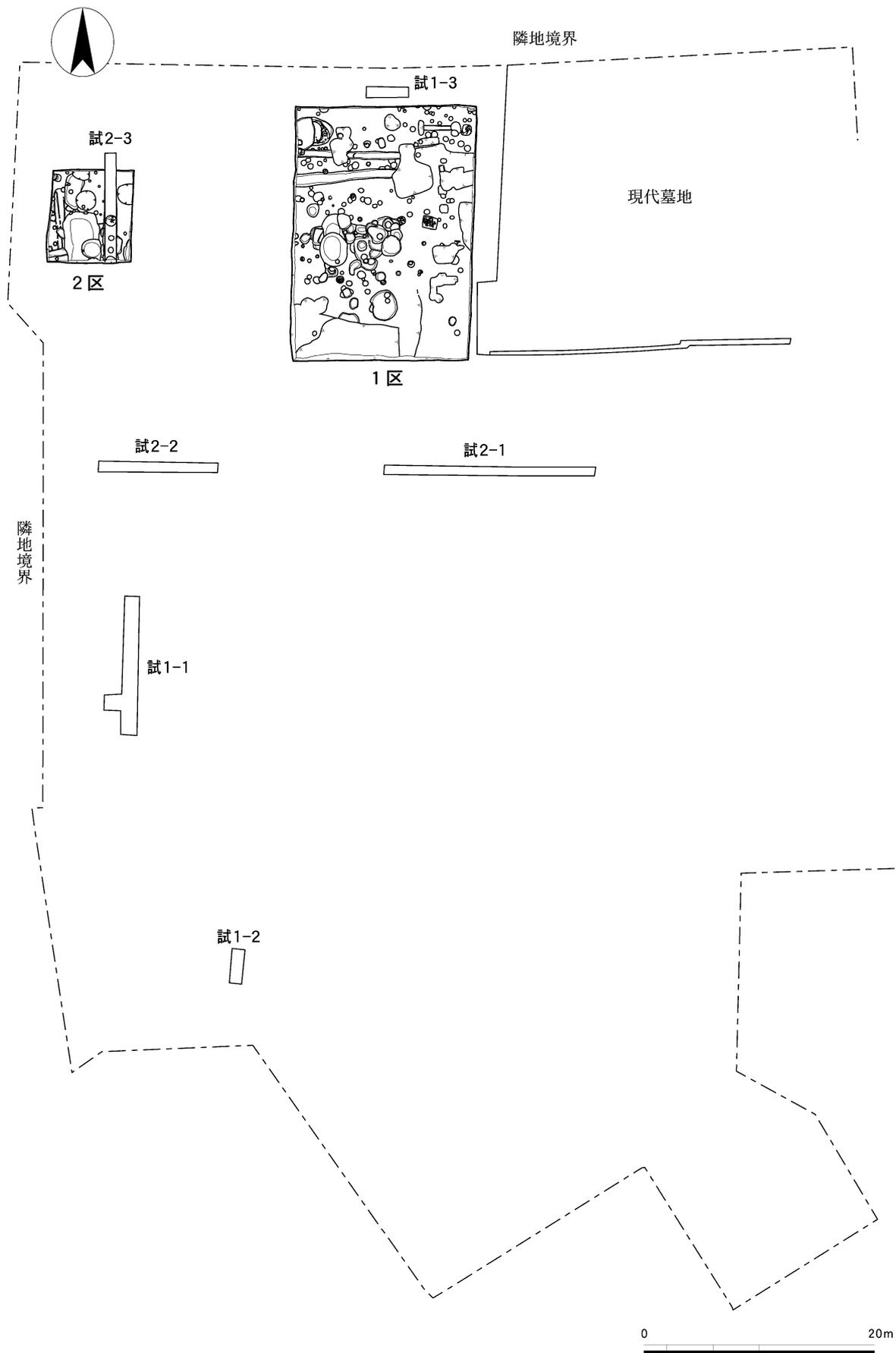


図2 調査区配置図 (1 : 500)

## 2. 位置と環境

調査地点は、古墳時代中期から江戸時代にかけての遺構が重複するとされる常盤仲之町遺跡の南東部と広隆寺旧境内に位置する。両遺跡は、古御室川などによって形成された洪積台地の南に下がる緩傾斜面に位置する。

調査地の北側約 300 mには、東西方向に嵯峨街道が延びている。この嵯峨街道は、旧行政区画である常盤村と太秦村を貫いて延びている。平安京と嵯峨野を結ぶ古道として平安時代には成立していたと考えられる。また、調査地の東約 100 mには城北街道が南北方向に延長するが、この街道が何時から成立したのかは不明である。近世には常盤村が仁和寺領であったのに対し、太秦村の多くは広隆寺領であり、広隆寺旧境内とも重複している。なお、明治時代の陸軍によって作成された「陸地測量図」によれば、調査地は茶畑と記載されている。太秦地域は、秦氏の根拠地として知られ、飛鳥時代に秦川勝が建立したとされる広隆寺が現存する。広隆寺は鎌倉時代後半に広隆寺桂宮院を拠点に、葬送儀礼の庶民への普及と太子信仰・仏舎利信仰によって教線を拡大した西大寺律宗真言僧澄禅が勧進上人として再興したことが知られている。また、今回の調査地の南約 50 mのところにあった弁天池の調査において、池の中島に平安時代後期の経塚群が築かれていることが判明し、弁天島経塚と名付けられたが、今日では消滅している。

広隆寺旧境内のこれまでの調査では、主要建物の検出はなく、飛鳥時代から奈良時代の遺構としては築地跡とみられる遺構や溝、瓦溜などを検出（図 5-6）しているのみである。平安時代の遺構は比較的多く検出されており、梵鐘鑄造遺構（図 5-13）や区画溝（図 5-19・21）、建物と柵（図 5-12）などが検出されている。なお、広隆寺建立直前にあたる古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構には、竪穴住居や掘立柱建物などがあり（図 5-5・12・13・23・24 など）、集落の存在が判明している。一方、常盤仲之町遺跡東部の 1976 年度調査（図 5-5）では、鎌倉時代から江戸時代にかけての土壇墓が 60 基以上検出されており、2006 年度調査（図 5-23）でも、室町時代後半の火葬場を示すと考えられる石組の施設と火葬墓が検出されている。広隆寺旧境内の北東部一帯が中世の墓域であったことを窺わせる。『京都市遺跡地図台帳』<sup>2)</sup>によれば、広隆寺旧境内は、常盤仲之町遺跡南半の大部分と重複するが、旧境内の範囲は不明な点が多く、今日までの調査で



図3 調査前全景



図4 現地公開風景

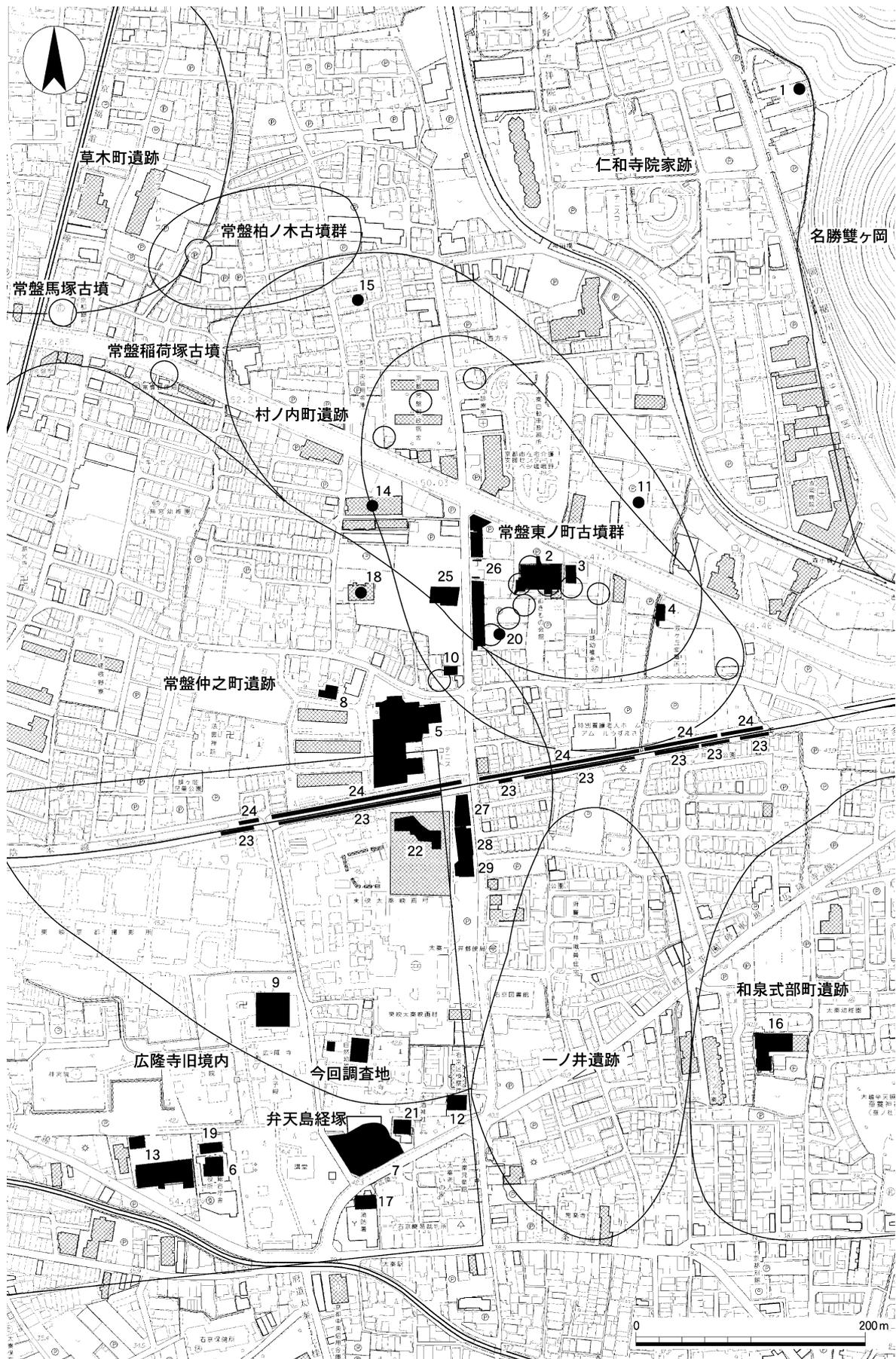


図5 調査地と周辺の遺跡（1：5,000）

表1 周辺調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文 献
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	「平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	『仁和寺子院跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
5	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦	
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土坑	「日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査」『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡 - 右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要 -』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑、平安時代の梵鐘鋳造遺構	『広隆寺跡』『京都府遺跡調査概報』第5冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
14	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・包含層、土師器・白磁	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
15	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	『和泉式部町遺跡』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	『広隆寺旧境内1』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	『広隆寺旧境内2』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	『常盤東ノ町古墳群』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土坑、平安中期の溝・柱穴	『広隆寺旧境内』『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の竪穴住居、古墳～飛鳥の竪穴住居、鎌倉の土壇墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
24	2008	発掘	2008.04.11～ 2008.06.27	弥生の竪穴住居、古墳後期～飛鳥の竪穴住居・溝ほか	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
25	2008	発掘	2008.11.25～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
26	2008	発掘	2008.11.10～ 2009.03.17	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
27	2008	発掘	2009.01.20～ 2009.03.19	奈良の掘立柱建物、鎌倉～室町の土坑・溝・落込みほか	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-21 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
28	2009	発掘	2009.12.14～ 2010.03.12	飛鳥の竪穴住居、平安の区画施設・溝・土坑、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-16 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
29	2009	発掘	2009.12.14～ 2010.02.02	飛鳥の竪穴住居、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-18 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年

※ Noは図5の調査地点の数字と対応

確定できているわけではない。2008年度調査（図5-27）では現城北街道に沿って中世の遺物を包含する幅2m以上の南北方向の溝が検出されている。また、その南の調査（図5-28・29）でも同一の溝を検出し、さらに飛鳥時代から平安時代中期にかけての東西方向の溝や高まりなどの区画施設も検出しており、広隆寺旧境内の東限がさらに東へ広がり、北限の区画も変遷が窺われる。当該地を含む嵯峨野地域の条里復元は文献史学と地理学によって進められてきたが、それらによれば広隆寺は葛野郡五条荒蒔里に該当するとされる。検出された現城北街道に沿う南北溝が五条荒蒔里東限の可能性もあり、嵯峨野条里復元と広隆寺東限の定点となる可能性が高い。

なお、周辺の遺跡調査成果については、表1に概要をまとめた。

### 3. 遺 構

平安時代から中世までの遺構を284基検出した。遺構の時期は平安時代中期から後期が主体で、柱穴、土坑、溝などがある。

基本層位は、地表下0.2～0.3mまでが現代盛土、旧耕作土で、以下は明黄褐色粘質土層と褐色砂礫層の地山となる。遺構は全て地山面で検出した。以下、1区と2区に分けて平安時代中期と鎌倉時代の遺構について概述する。

#### (1) 1区の遺構（図版1、図6）

検出した遺構数は249基である。遺構には柱穴、土坑、溝などがある。ほとんどが平安時代中期から後期の遺構であるが、中世の遺構もある。

##### 1) 平安時代の遺構

溝2（図8） 調査区の北西部で検出した東西方向の溝であるが、東で北にやや振れる。東西約9m分検出した。東側は攪乱され消失していたが、西側は調査区外に延びていた。規模は幅0.7～1.0m、深さ0.2～0.3mである。埋土はレンズ状に堆積している。後述する2区の溝15と一連の遺構であろう。出土遺物から平安時代中期と考えられる。

集石73（図8） 調査区東部で検出した。平面形状は方形で、規模は東西約1.3m、南北約1m、深さ0.45mである。土坑内は角礫が積み重なった状態で、礫をとり除くと北西隅に完形の土師器皿が1枚、正位置に据えられていた。炭、鉄釘なども出土していることから墓坑の可能性がある。

表2 遺構概要表

時 期	遺 構	備 考
平安時代中期～後期	土坑、溝、柱穴、柱列、柵	
中世～近世	土坑、溝、柱列	



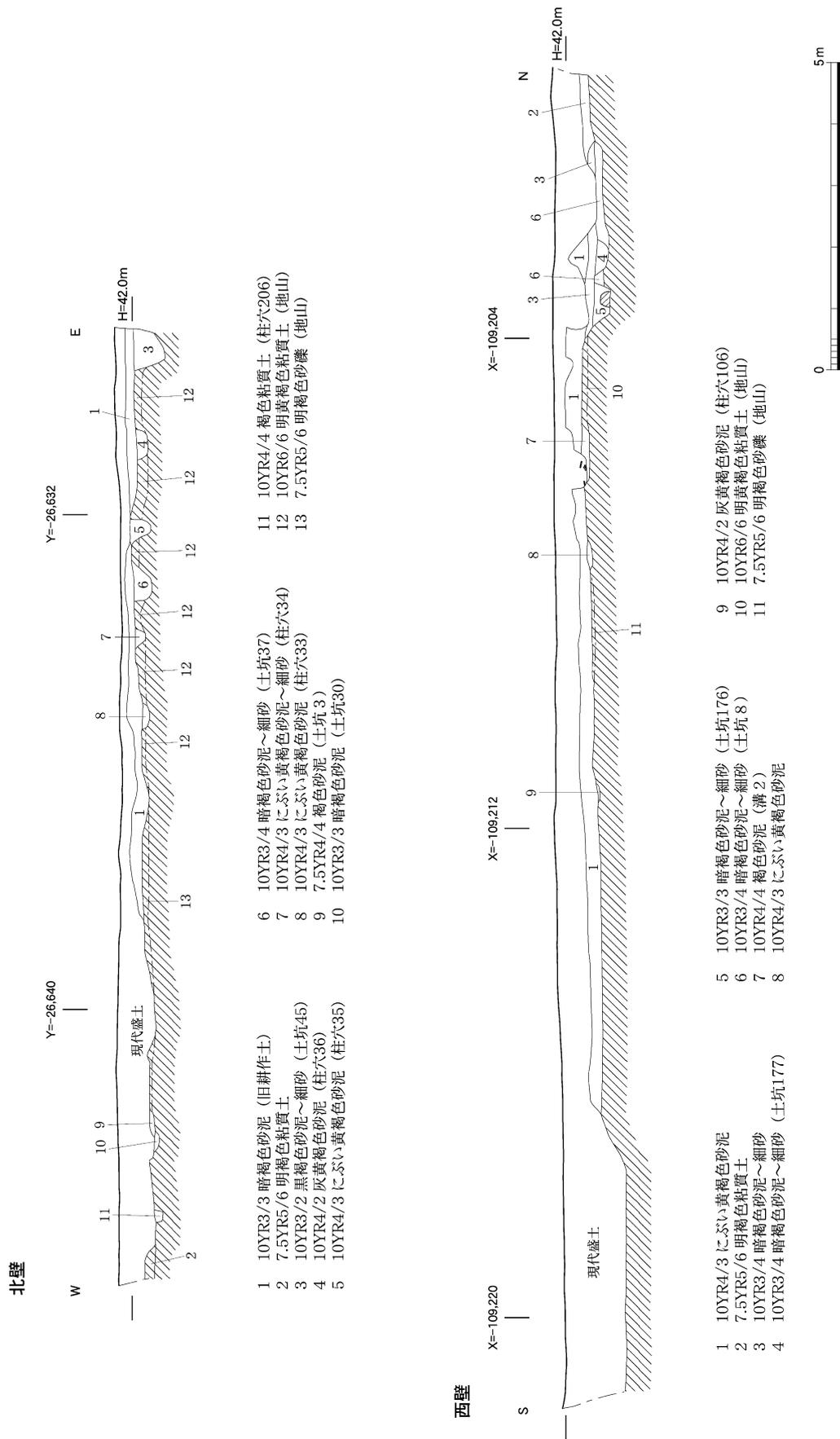
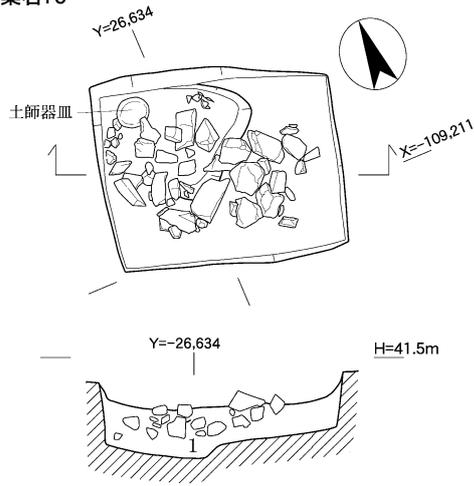


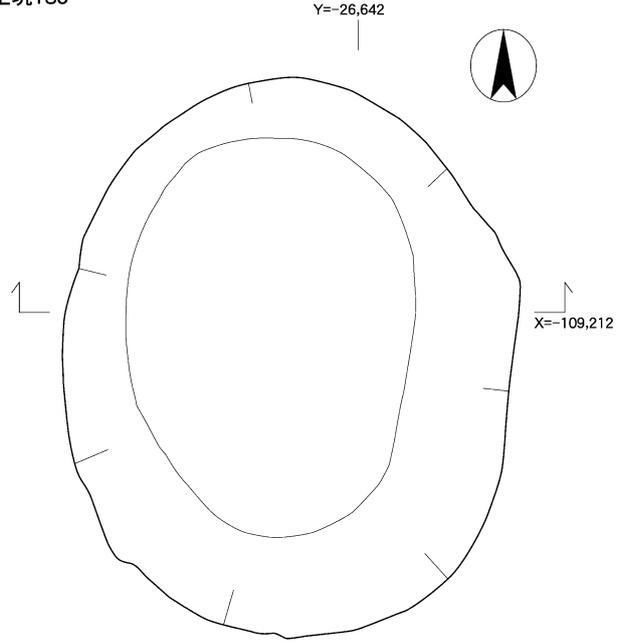
図7 1区北壁・西壁断面図 (1 : 100)

集石73

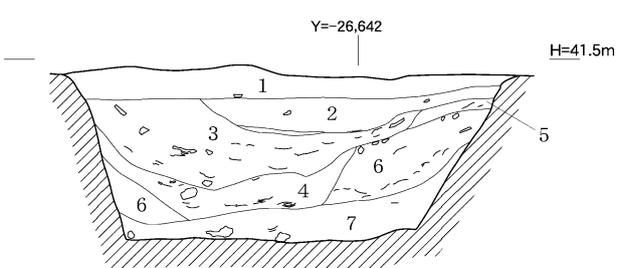
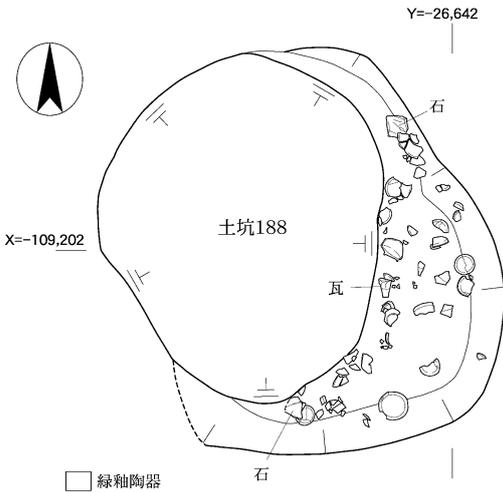


- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭・酸化鉄微量

土坑183

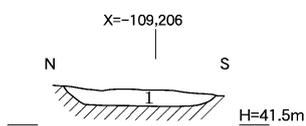


土坑189



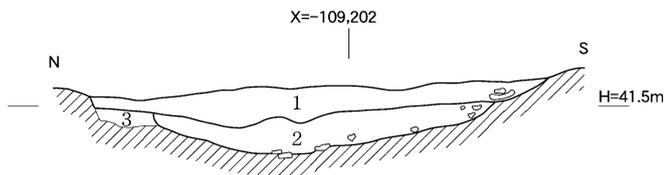
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥  
 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、底部に炭含む  
 3 10YR4/4 褐色砂泥  
 4 10YR3/3 暗褐色砂泥  
 5 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥  
 6 10YR4/6 褐色砂泥  
 7 10YR3/2 黒褐色砂泥

溝2



- 1 10YR4/4 褐色砂泥

土坑8・188



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭少量 (土坑8)  
 2 10YR3/3 暗褐色砂泥～細砂 (土坑188)  
 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (土坑189)



図8 1区溝2、集石73、土坑8・183・188・189実測図(1:40)

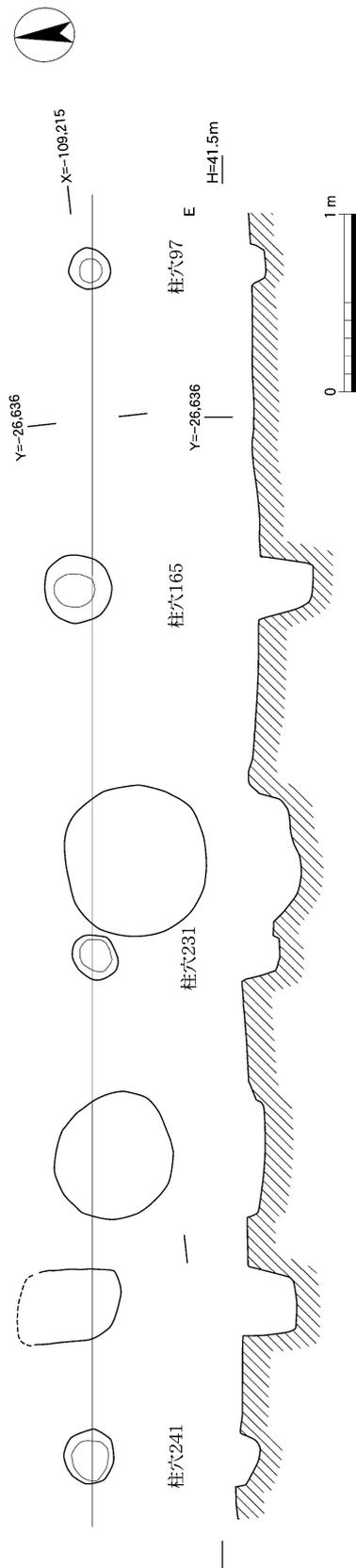


図9 1区柱列1実測図 (1:40)

土師器皿の小片から中片と小礫や炭片を多く含む。その下は灰黄褐色砂泥層で、土師器皿小片から中片を多く含み、層下面に厚さ 0.3 ~ 0.4 cmの炭層がみられる。その下に褐色砂泥・暗褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥層がみられ、それらの層からは炭片、焼土や鉄釘、鉄滓とともに土師器皿の完形が多く出土している。最下層は黒褐色砂泥で土師器皿小片から中片と炭片を多量に含んでいた。出土遺物から平安時代中期前半と考えられる。

土坑 188 調査区北半部の西端で検出した。平面形状は不定形である。土坑 8・189 と重複している。規模は南北 1.6 m、東西 1.2 m、深さ 0.2 m である。埋土は炭を含む暗褐色砂泥層である。土坑内からは土師器皿、軒平瓦などが出土している。出土遺物から平安時代中期と考えられる。

土坑 189 (図版 1、図 8) 調査区の北半部の西側で検出した。平面形状は楕円形とみられるが、西側は土坑 188 に削平されている。残存規模は南北約 2 m、東西 1 m、深さ 0.2 m である。埋土は褐色砂泥層で炭片や小礫を含む。東側の肩部には土師器皿と緑釉陶器三足火舎や緑釉陶器碗などが置かれた状態で出土した。出土遺物から平安時代中期後半と考えられる。

土坑 197 調査区の西半部で検出した。土坑 183 に西接している。平面形状は楕円形である。規模は東西 0.8 m、南北 0.9 m で、深さ 0.3 m である。埋土は焼土や炭片を含む赤褐色砂泥層で、内からは土師器皿、須恵器鉢、軒丸瓦などが出土している。出土遺物から平安時代中期後半と考えられる。

土坑 208 調査区のほぼ中央部で検出した。平面形状は円形で、規模は径約 2.0 m、深さ 0.3 m である。底面は比較的平坦である。埋土は暗褐色砂泥層で、内からは土師器皿片や緑釉陶器や灰釉陶器などが多く炭片や焼土も少量含む。出土遺物から平安時代中期後半と考えられる。

土坑 211 調査区の西半で検出した。平面形状は楕円形で、規模は南北約 1.1 m、東西約 1.9 m、深さ 0.7 m である。埋土は褐色砂泥層で、内からは土師器皿を中心に緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器などが多く出土した。出土遺物から平安時代中期後半と考えられる。

土坑 218 調査区のほぼ中央で検出した。東辺は削平をうけているが、平面形状は楕円形である。規模は南北 1.0 m、東西 1.1 m、深さ 0.3 m である。埋土は小礫を含む暗褐色砂泥層で、内から土師器皿が多く、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀などが出土している。出土遺物から平安時代中期後半と考えられる。

土坑 221 調査区南半部のやや西で検出した。平面形状は楕円形である。規模は東西約 1.0 m、南北 0.6 m、深さ 0.3 m である。埋土はオリーブ褐色砂泥層で、内から土師器皿、軒平瓦などが出土している。出土遺物から平安時代中期と考えられる。

土坑 224 調査区西部で検出した。平面形状は楕円形とみられる。南辺は土坑 183 と、北東辺は土坑 211 と重複している。残存規模は東西約 1.8 m、南北 1.5 m、深さ 0.7 m である。埋土は褐色砂泥層で、土師器皿、二彩陶器片、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀、軒平瓦などが出土している。出土遺物から平安時代中期前半から中頃と考えられる。

柱列 1 (図 9) 調査区南半部で検出した東西方向の柱列で 3 間ある。柱間は東から 1.8 m、2.0 m、2.8 m とばらつきがある。出土遺物から平安時代中期と考えられる。

## 2) 中世の遺構

埋土に中世の瓦片や軒瓦を含む溝・土坑と柱列で、以下に概述する。

溝 1 調査区北半で検出した東西方向の溝である。幅 0.5 m、深さ 0.2 m である。東西延長 9 m 分を検出した。東側は削平を受けていたが、西側は調査区外に延びていた。区画溝とみられる。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

土坑 8 (図 8) 調査区北半部の西壁沿いで検出した。平面形状は方形である。調査区外の西に延びる。規模は南北 2.5 m、東西 1.5 m 以上、深さは 0.2 m ある。埋土は炭、小礫を含む暗褐色砂泥層である。土坑内からは土師器皿、軒平瓦が出土している。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

土坑 176 調査区北半部の西壁沿いで検出した。平面形状は不定形で調査区外西に延びる。規模は南北 0.7 m、東西 0.5 m 以上、深さ 0.4 m である。土坑内には長辺 0.6 m の砂岩が据えられていた。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

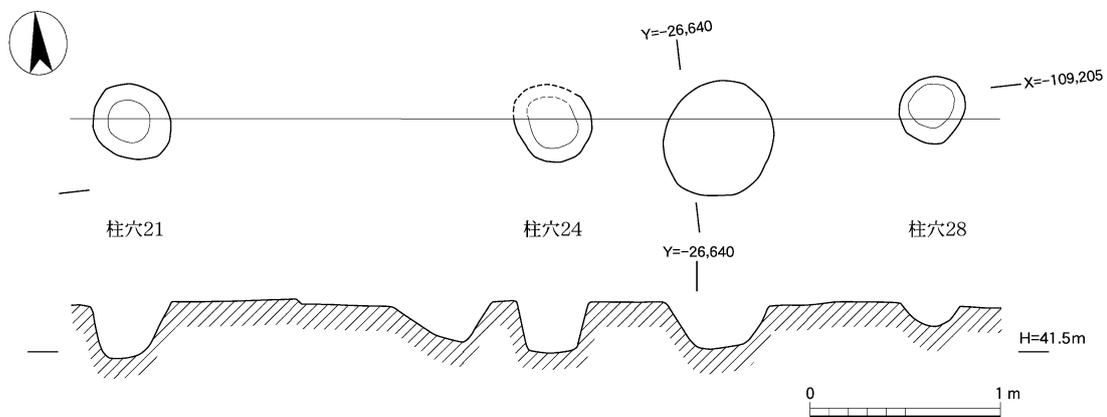
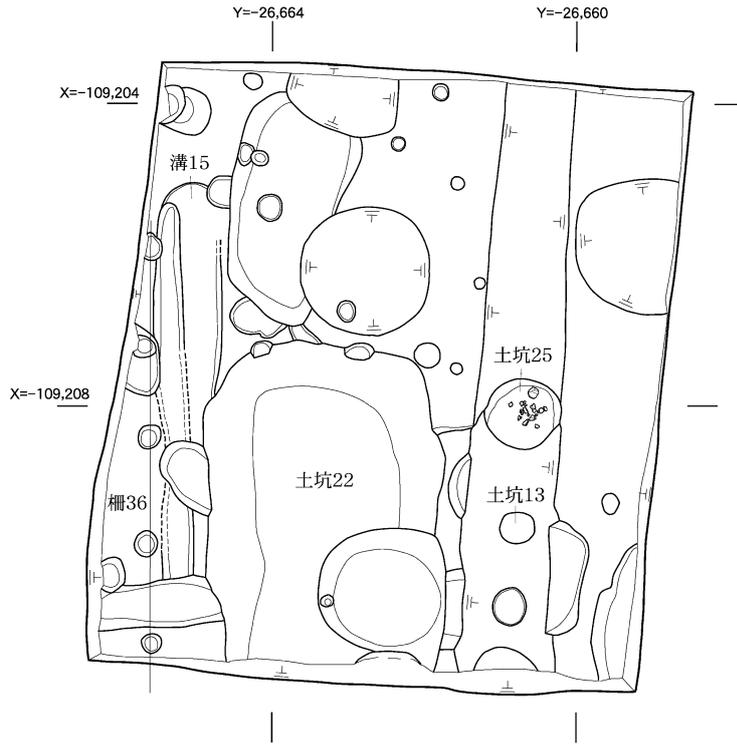
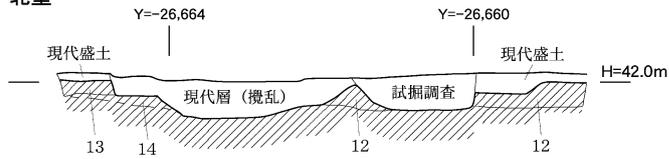


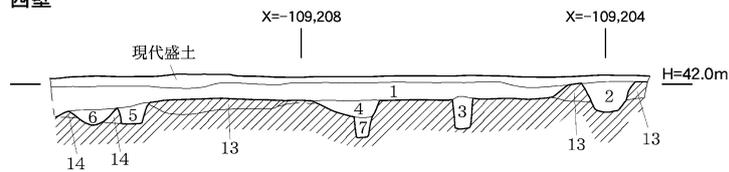
図 10 1 区柱列 2 実測図 (1 : 40)



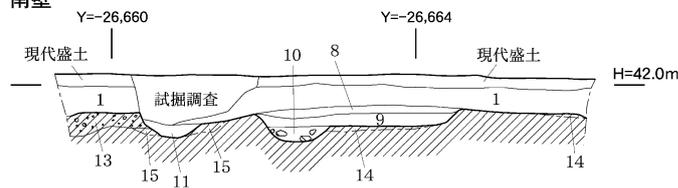
北壁



西壁



南壁



- |                           |                               |
|---------------------------|-------------------------------|
| 1 10YR3/4 暗褐色砂泥～細砂 (旧耕作土) | 9 10YR3/4 暗褐色砂泥～細砂 (土坑22)     |
| 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 (土坑1)     | 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥～細砂 (土坑35) |
| 3 10YR4/4 褐色砂泥 (柱穴33)     | 11 10YR3/4 暗褐色砂泥              |
| 4 10YR3/3 暗褐色砂泥～細砂        | 12 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥～細砂 (地山)   |
| 5 10YR3/3 暗褐色砂泥～細砂 (柱穴27) | 13 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (地山)      |
| 6 10YR3/3 暗褐色砂泥 (溝16)     | 14 10YR4/4 褐色砂礫 (地山)          |
| 7 10YR4/4 褐色砂泥 (柱穴23)     | 15 10YR4/6 褐色粘質土 (地山)         |
| 8 10YR3/4 暗褐色砂泥 (土坑22)    |                               |



図11 2区遺構実測図 (1:100)

柱列 2 (図 10) 調査区北半で検出した。溝 1 に沿った東西方向の柱列で 2 間分ある。柱間は東から 2.0 m、2.2 m である。柵と考えられる。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

## (2) 2 区の遺構 (図版 3、図 11)

検出した遺構数は 35 基である。遺構には柱穴、土坑、溝、柵などがある。

### 1) 平安時代の遺構

溝 15 調査区の西端で検出した南北方向の溝である。西肩は近代の耕作溝と重複している。北約 6 m で東に折れ曲がる様相を呈していたが、東側の延長部は削平を受け消失している。1 区の溝 2 に繋がる同一の溝と考えられる。規模は幅 0.5 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。埋土は褐色砂泥層である。出土遺物から平安時代中期と考えられる。

土坑 13 調査区南半の東で検出した。平面形状は円形で、径約 0.6 m、深さ 0.3 m である。埋土は炭を含む暗褐色砂泥で、底部外面に墨書がある須恵器片や土師器皿、緑釉陶器碗などが出土した。出土遺物から平安時代中期前半から中頃と考えられる。

土坑 22 調査区中央から南半にかけて検出した。平面形状は方形とみられるが、調査区外の南に延びる。規模は東西約 6 m、南北 4 m 以上、深さ約 0.6 m である。埋土は炭、焼土を含む褐色砂泥層で、多量の土師器皿と緑釉陶器碗・皿や灰釉陶器碗、軒平瓦などが出土している。出土遺物から平安時代中期前半から中頃と考えられる。

土坑 25 (図版 3、図 12) 調査区南半の東で検出した。平面形状は円形で、径約 1 m、深さ約 0.4 m である。埋土は炭や焼土を含む褐色砂泥層で、底面には土師器皿や緑釉陶器碗などが置かれた状態で出土した。墓坑の可能性

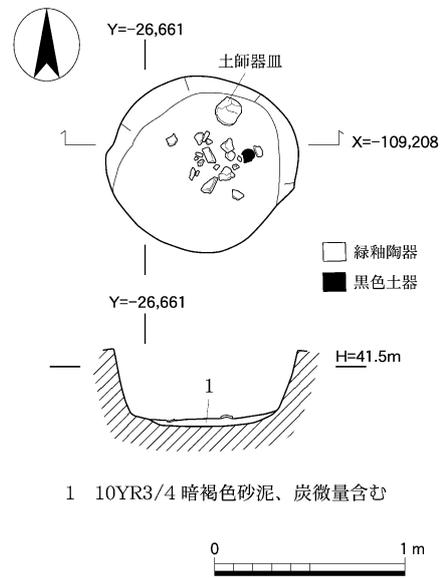


図 12 2 区土坑 25 実測図 (1 : 40)

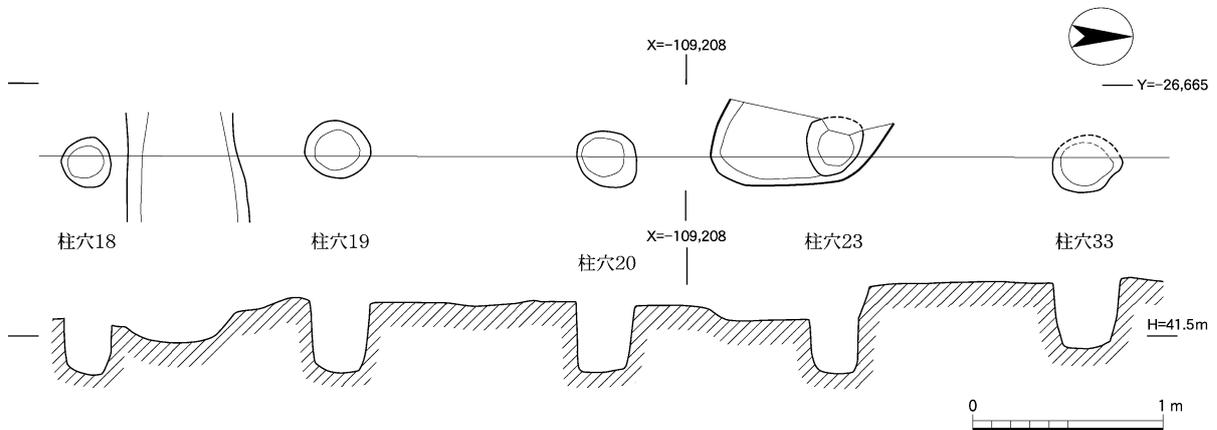


図 13 2 区柵 36 実測図 (1 : 40)

性がある。出土遺物から平安時代中期前半から中頃と考えられる。

## 2) 中世の遺構

柵 36 (図版 3、図 13) 調査区西端で検出した。溝 15 に沿って南北に 4 間分を検出した。さらに調査区外北と南に延びる。柱間はほぼ 1.3 m 等間である。南北方向の柵とみられる。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

# 4. 遺 物

出土した遺物は整理箱 34 箱で、平安時代から近世までである。出土遺物には土器類、瓦類、石製品、金属製品などがある。遺物の大半は土器類が占める。時期別にみると土坑群から出土した平安時代中期の遺物が多くを占めるが、少量、平安時代前期後半代の遺物も混入している。

平安時代の遺物には土器類、瓦類、金属製品などがある。土器類が最も多く、次いで瓦類が多い。土器類には土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器などがある。11 世紀中頃～後半が主体である。土師器には口縁部が屈曲する、いわゆる「ての字状」口縁をもつ皿が多くみられる。須恵器は鉢・甕・瓶子などがある。緑釉陶器は椀・皿・壺・火舎などがある。灰釉陶器は椀・皿・壺などがある。黒色土器は椀・皿・盤などがある。輸入陶磁器には二彩陶器や口縁端部が玉縁状の白磁椀と青磁椀がある。

なお、土器の編年観については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」(『研究紀要』第 3 号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996 年)を基準とした。

瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦など平安時代前期から後期のものと鎌倉時代のものがある。瓦類全体においては平安時代の丸瓦、平瓦が多い。

金属製品は鉄製品が多くを占め、鉄釘が最も多い。刀子や円形の板状製品もみられる。いずれも錆化しており遺存状態は悪い。以下に主要な遺物について 1 区と 2 区に分けて概述する。

表 3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、石製品		土師器 62 点、須恵器 9 点、黒色土器 11 点、白色土器 6 点、緑釉陶器 11 点、灰釉陶器 6 点、輸入陶磁器 4 点、軒丸瓦 4 点、軒平瓦 4 点、金属製品 3 点、石製品 1 点	33 箱	0 箱
中世～近世	土師器、陶磁器、瓦器、瓦		軒平瓦 1 点	1 箱	0 箱
合 計		46 箱	122 点 (12 箱)	34 箱	0 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A ランクの遺物を抽出したため、出土時より 12 箱多くなっている。

## (1) 1区出土土器

土坑183(図版4・5、図14 1～35) 土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。京都Ⅲ期新～Ⅳ期古に属する。

土師器には皿A・L・N、杯L・N、鉢がある。1～5は小型の皿Aで、口径8.8～10.7cm、高さ1.0～1.5cmである。いずれも口縁部は屈曲して外上方に延び、二重のナデ痕を残す。6～8は中型の皿Lで、口径10.9～12.9cm、高さ1.5～1.9cmである。9は大型の皿Nで、口径14.8cm、高さ2.4cmである。口縁部は外斜め上方に延び、外面には二重のナデ痕を残す。11・13は大型の杯Lで、口径15.8cm・17.8cm、高さ2.8cm・3.4cmである。器壁は薄く、口縁部は外斜め上方に延び、端部は丸くおさめる。外面には一重のナデ痕を残す。10・12・14～17は杯Nである。14は中型の杯Nで、口径13.8cm、高さ3.4cmである。外面下半に指圧痕が明瞭に残る。10・12・15～17は大型の杯Nで、口径15.8～17.8cm、高さ3.0～3.4cmである。口縁部は外斜め上方に延び、外面には二重のナデ痕を残す。35は大型の鉢で、口径33.8cm、高さ8.4cm、底径10.1cmである。口縁部は斜め外方に大きく開き、底部外面には高台が付く。体部外面には輪積みによる継ぎ目痕跡が明瞭に残る。

須恵器には椀、鉢がある。27・28は椀である。28は平底の小型椀で、口径9.5cm、高さ3.4cm、底径4.5cmである。口縁部は斜め外方に延び、端部は丸くおさめる。底部外面に糸切り痕が明瞭に残る。27は中型の椀で、口径13.6cm、高さ4.7cm、底径7.6cmである。体部は丸味をもち、口縁部は上方に延び、端部は丸くおさめる。体部と底部外面には墨書がみられる。体部は「頤口(誦か?)」と読める。底部は不明である。34は片口鉢で、口径28.3cm、高さ14.8cm、底径11.1cmである。口縁端部はやや屈曲し上方に延びる。口縁端部を幅2cmほど押さえて片口とする。焼成は良好である。

黒色土器には皿、椀がある。29～31は内外面を黒色化したB類である。29は皿で、口径10.1cm、高さ1.5cmである。口縁部は斜め外方に延び、端部は丸くおさめる。30・31は椀で、口径15.8cm・15.5cm、高さ5.3cm・5.2cmである。内外面ともに丁寧にヘラミガキされる。口縁端部は内側に段が付く。32は内面を黒色化したA類の椀で、口径16.0cm、高さ5.3cmである。内面はヘラミガキされ、外面は口縁部を除き丁寧にヘラケズリされる。

白色土器には皿がある。18は小型の皿で、口径10.8cm、高さ2.2cm、底径3.7cmである。19・20は中型の皿で、口径12.8cm・13.6cm、高さ2.2cm・2.4cm、底径5.2cm・5.7cmである。21は大型の皿で、口径15.8cm、高さ2.4cm、底径6.5cmである。18～21はいずれも扁平な体部に削り出しによる輪高台が付く。

緑釉陶器には椀、皿、壺がある。22・23は椀である。22は口径14.7cm、高さ5.9cm、底径7.7cm、23は口径16.0cm、高さ7.1cm、底径7.8cmである。いずれも体部の形状はやや丸みをもち、口縁端部は斜め外方に延びる。底部は糸切りで高台を貼り付ける。近江産とみられる。24は皿で、口径12.5cm、高さ2.5cm、底径6.6cmである。口縁部は斜め外方に延びる。底部は貼付高台である。

土坑183

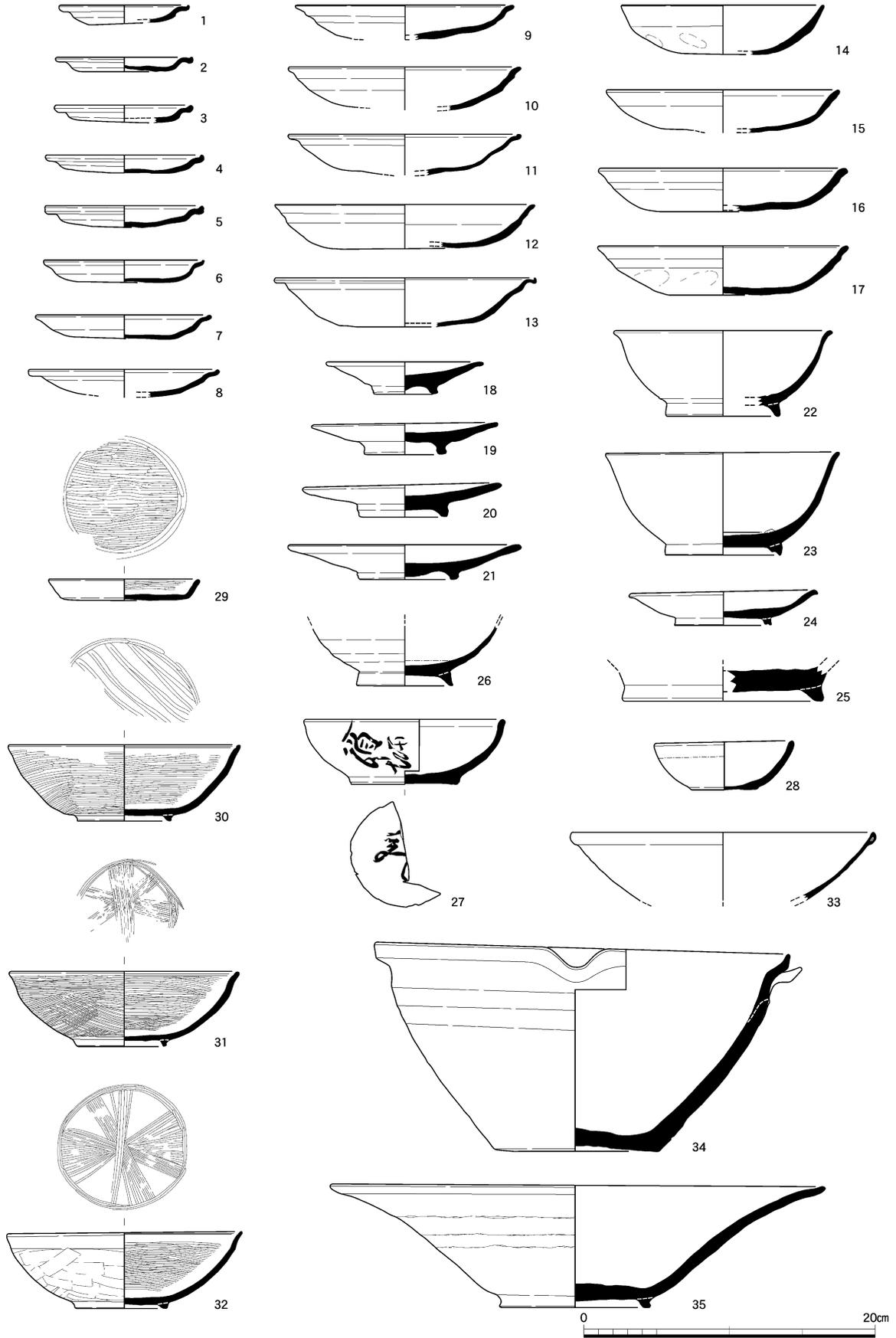


图14 1区出土土器实测图1 (1:4)

近江産とみられる。25は壺底部の破片とみられる。底径13.4 cmである。高台は貼付で、濃緑色の釉が全面に施されている。

灰釉陶器には椀がある。26は口縁部が欠損しているが、体・底部は残存している。底径6.5 cm、残存高4.1 cmである。底部は糸切りで高台を貼り付ける。

輸入陶磁器には白磁椀がある。33は底部が欠損し、体部上半から口縁部が残存している。口径20.6 cm、残存高4.7 cmである。口縁端部は玉縁状を呈する。華南産とみられる。

土坑189(図版5、図15 36～47) 土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。京都IV期古～IV期中に属する。

土師器には皿A、杯Nがある。36～41は小型の皿Aで、口径10.1～11.2 cm、高さ0.8～2.0 cmである。いずれも口縁部は屈曲して外上方に延び、二重のナデ痕を残す。42・43は杯Nである。42は中型の杯Nで、口径13.5 cm、高さ2.5 cm、43は大型の杯Nで、口径17.1 cm、高さ3.6 cmである。いずれも口縁部は外斜め上方に延びる。

緑釉陶器には椀、三足火舎がある。44・45は椀である。44は体部下半と高台部が残存している。底径7.0 cmである。45は口径15.6 cm、高さ6.5 cmである。いずれも底部は糸切りで高台を貼り付ける。釉調は、44は浅緑色で、45は深緑色である。焼成は、44はやや軟質で、45は硬質である。いずれも近江産とみられる。46は三足火舎で、脚部は欠損しているが、盤部はほぼ完形である。径13.5 cm、高さ2.5 cmである。口縁部は屈曲して横上方に延び、端部は面をもつ。底部には端部に突帯を貼り付け面取りされる。足は体部下半の3箇所に取り付けられる。淡緑色の釉が全面に施される。胎土は軟質である。

輸入陶磁器には青白磁椀(47)がある。口縁部の破片で、口径15.2 cmである。器壁は薄手で、口縁部は斜め上方に延びる。景德鎮窯産の可能性はある。

土坑197(図版5、図15 48) 土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。京都IV期古～中に属する。

残存が良い須恵器鉢(48)を図示する。48は口径21.6 cm、高さ8.4 cm、底径9.2 cmである。外上方に延びる体部をもつ。端部は肥厚しておさめる。底部は糸切り後、ナデで調整している。

土坑208(図版6、図15 49～57) 土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。京都IV期古～中に属する。

土師器には皿A・N、杯L・N、鉢がある。49は小型の皿Aで、口径10.0 cm、高さ1.1 cmである。口縁部は屈曲する。50・51は小型の皿Nで、口径11.0 cm、高さ1.9 cmである。いずれも口縁部は斜め外方に延びる。52は中型の杯Lで、口径12.0 cm、高さ2.3 cm、53は大型の杯Lで、口径16.0 cm、高さ2.3 cmである。いずれも口縁部は斜め外方に延びる。54は大型の杯Nで、口径17.0 cm、高さ2.3 cmである。55・56は大型の鉢である。55は口径30.5 cm、高さ12.5 cm、底径15.0 cmである。体部は丸みをもち、口縁部は上方に延びる。底部には外方に張り出す高台を貼り付ける。56は口径35.5 cm、高さ16.5 cmである。口縁端部と底部が欠損していたが、全体の1/4が残存していた。体部は斜め外方に延び、口縁部はさらに外方に開く。体部外面には粘土紐の

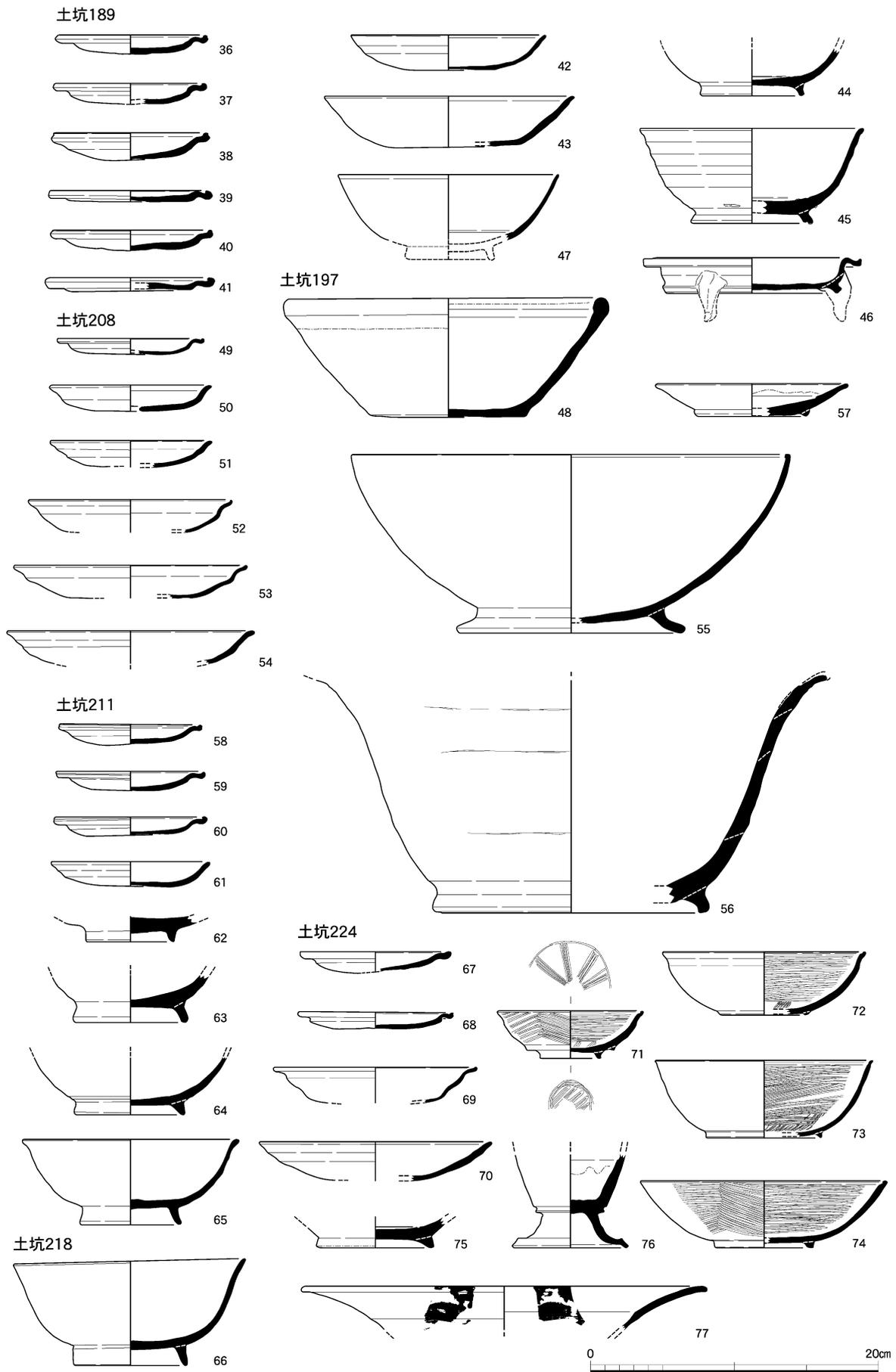


图 15 1区出土土器实测图2 (1:4)

継ぎ目痕跡が明瞭である。底部は高台を貼り付ける。

灰釉陶器には皿がある。57は段皿で、口径13.4 cm、高さ2.3 cmである。口縁部が斜め外方に延び、内面には段が付く。底部は糸切りの後、高台を貼り付ける。内面底部は平滑で朱が付着している。

土坑211(図版6、図15 58～65) 土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、白色土器、輸入陶磁器が出土している。京都IV期古～中に属する。

土師器には皿A・Nがある。58～60は小型の皿Aで、口径9.6～10.3 cm、高さはいずれも1.4 cmである。口縁部は屈曲する。61は小型の皿Nで、口径10.7 cm、高さ1.8 cmである。口縁部は斜め外方に延びる。

白色土器には皿、椀がある。62は皿の底部で、底径6.1 cmである。高台は削り出す。63は椀の底部で、底径7.6 cmである。高台は削り出す。

緑釉陶器には椀がある。64は椀の体・底部で、底径7.4 cmである。内面底部には圈線がみられ、底部は高台を貼り付ける。近江産とみられる。

灰釉陶器には椀がある。65は口径14.6 cm、高さ6.9 cm、底径7.0 cmの椀である。口縁部は斜め外方に延びる。底部には細長い高台を貼り付ける。

土坑218(図版6、図15 66) 土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。京都IV期古～中に属する。

保存状況が良い灰釉陶器椀(66)を図示した。66は口径16.0 cm、高さ7.5 cm、底径7.5 cmの椀である。体部はやや丸みをもち、口縁部は外に開く、底部には細長い高台を貼り付ける。

土坑224(図版6、図15 67～77) 土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。京都III期新～IV期中に属する。

土師器には皿A・N、杯Lがある。67・68は小型の皿Aで、口径10.3 cm・10.6 cm、高さ1.5 cm・1.2 cmである。口縁部は屈曲する。69は中型の杯Lで、口径14.0 cm、高さ2.5 cmである。薄手で口縁部は屈曲する。70は大型の皿Nで、口径16.0 cm、高さ2.8 cmである。口縁部は斜め外方に延びる。

黒色土器には椀がある。71～74はいずれも内外面が黒色のB類である。71は小型の椀で、口径10.0 cm、高さ3.3 cmである。体部と底部の境界に断面三角形の突帯が巡る。底部には高台を貼り付ける。内外面と底部外面ともに丁寧にミガキを施す。口縁端部の内面に1条の圈線が巡る。72・73は中型の椀で、口径14.0 cm・15.0 cm、高さ4.5 cm・5.4 cmである。ともに外面はオサエ後ナデで調整、内面は丁寧なミガキを施す。口縁端部の内面に1条の圈線が巡る。74は大型の椀で、口径17.0 cm、高さ4.7 cmである。底部外面を除き内外面ともに丁寧なミガキを施す。口縁端部の内面に1条の圈線が巡る。

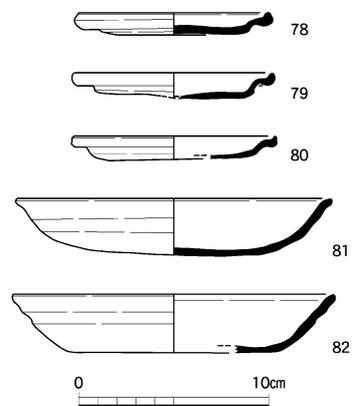


図16 1区出土土器実測図3(1:4)

緑釉陶器には椀、花瓶がある。75は椀の底部で、底径7.7

cm、残存高 2.1 cmである。内面底部には 1 条の圈線がみられ、濃緑色の釉が施されている。底部外面には糸切り後に高台が貼り付けられる。近江産とみられる。76 は花瓶の体部下半と台脚部で、底径 8.1 cm、残存高 6.5 cmである。台脚部の高さは 2.5 cmである。体部と脚部の境界には幅 0.4 cmの圈線と下に幅 0.2 cmの紐帯が巡る。脚の端部は段を成し、外方に張り出す。淡緑色の釉を体部外面と台脚部内外面ともに丁寧に施す。密教法具の垂字形花瓶を模したものとみられる。

輸入陶磁器には二彩陶器がある。77 は緑色と白色の釉を内外面に施した皿とみられる。口径 28.2 cm、残存高 3.1 cmである。胎土は灰白色で堅緻である。

集石 73 (図版 5、図 16 78～82) 土師器がある。京都Ⅳ期中～新に属する。

土師器には皿 A・杯 N がある。78～80 は小型の皿 A で、口径 9.8～10.5 cm、高さ 1.2～1.4 cmである。口縁部は屈曲する。81・82 は大型の杯 N で、口径 16.5 cm・16.9 cm、高さはいずれも 3.1 cmである。口縁部はやや厚く、斜め外方に延び、口縁部外面に二重のナデがみられる。

## (2) 2 区出土土器

土坑 22 (図版 7、図 17 83～102) 土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。京都Ⅲ期新～Ⅳ期中に属する。

土師器には皿 A・N、高杯、甕、鉢がある。83～87 は小型の皿 A で、口径 9.5～11.3 cm、高さ 1.2～1.4 cmである。口縁部は屈曲する。88～90 は中型の皿 N で、口径 12.6～14.4 cm、高さ 2.2～2.6 cmである。口縁部は斜め外方に延び、口縁部外面に二重のナデがみられる。いずれも口縁部内・外面に油煙が一部附着している。91・92 は高杯の脚部である。91 は外面をヘラケズリで面取りし、断面六角形を呈する。92 は杯部の接合部に近く、外面をヘラケズリで面取りし、断面は八角形を呈する。93 は小型の甕で、口径 17.4 cmである。内外面は横ナデで調整している。94 は鉢の底部で、底径 10.0 cm、残存高 5.7 cmである。底部外面には高台を貼り付け、2.5 cm上に断面三角形の凸帯が巡る。内・外面はいずれもナデで調整している。

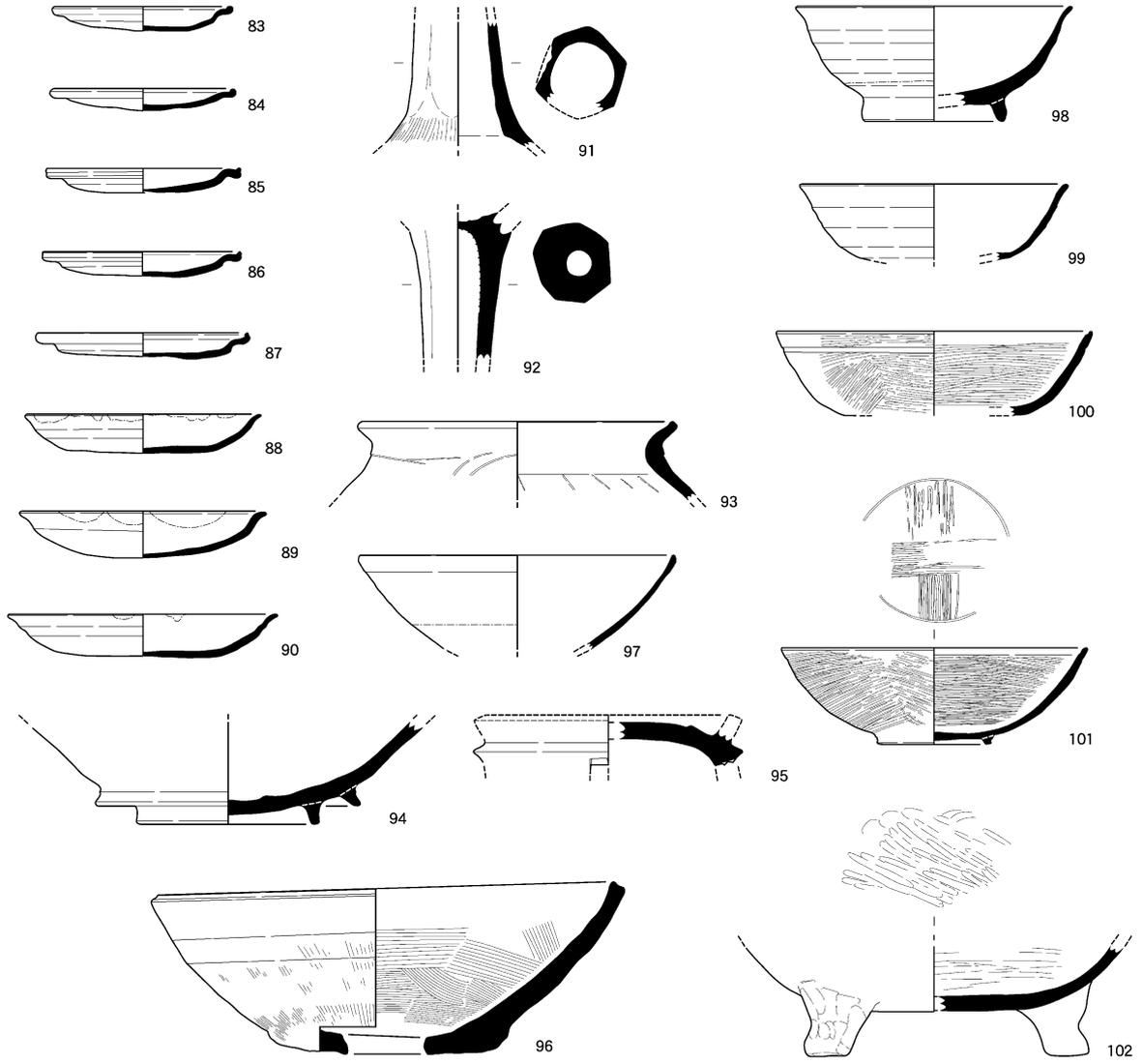
須恵器には鉢、硯がある。96 は鉢で、口径 24.7 cm、高さ 9.4 cm、底径 12.9 cmである。底部にはほぼ中央に径 4.2 cmの孔を焼成前に穿っている。口縁部を除く内面は斜め・横方向のハケ目痕が明瞭に残り、外面は縦方向のハケ目がナデで調整されている。95 は円面硯の陸部と脚部の方形透かしの一部である。陸部は擦痕により平滑で、裏面はナデによる調整痕がみられる。

輸入陶磁器には白磁碗がある。97 はやや大型の碗で、口径 17.2 cm、残存高 5.2 cmである。口縁端部は肥厚する。内面はほとんどに、外面は体部下半まで灰白色の釉を施す。

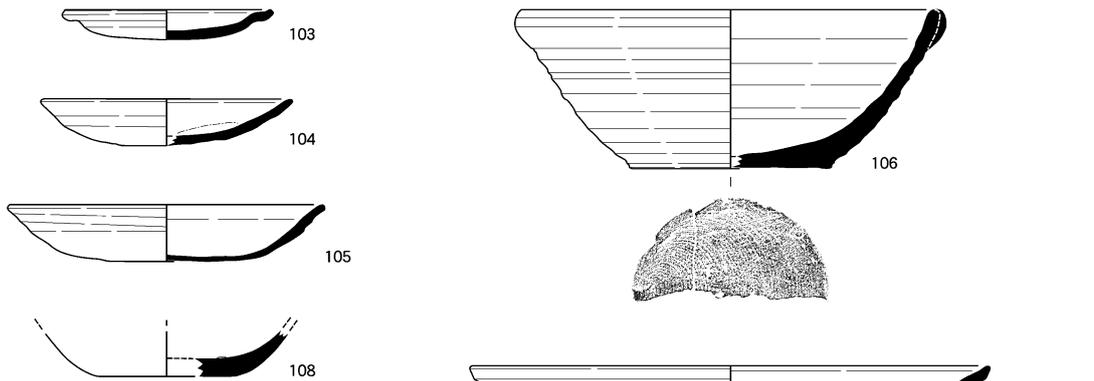
灰釉陶器には碗がある。98 は口径 15.0 cm、高さ 6.3 cm、99 は口径 14.6 cm、残存高 4.2 cmである。98 は底部を除いて内外面ともに灰白色の釉を施す。

黒色土器には碗、盤がある。100・101 は内外面とも黒色化した B 類の碗である。100 は口径 17.2 cm、残存高 4.6 cm、101 は口径 16.6 cm、高さ 5.5 cmである。いずれも内・外面ともに丁寧なミガキを施す。102 は内面のみ黒色化した盤の底部の一部で、残存高 6.0 cmである。外方に張り出す脚をもち、外面はヘラケズリを施す。三脚の可能性はある。

土坑22



土坑25



土坑13

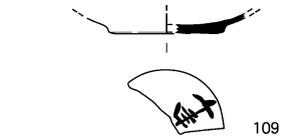


图 17 2区出土土器实测图(1:4)

土坑 25 (図版 7、図 17 103～108) 土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。京都Ⅲ期新～Ⅳ期中に属する。

土師器には皿 A・N、杯 N がある。103 は皿 A で、口径 10.7 cm、高さ 1.6 cm である。口縁部は屈曲する。104 は中型の皿 N で、口径 12.9 cm、高さ 2.5 cm である。口縁部は斜め外方に延び、口縁部外面に二重のナデ痕が残る。105 は大型の杯 N で、口径 16.4 cm、高さ 3.0 cm である。口縁部はやや厚く、斜め外方に延び、口縁部外面に二重のナデ痕が残る。

須恵器には鉢がある。106 は口径 22.6 cm、高さ 8.4 cm、底径 10.4 cm である。外上方に延びる体部をもち、口縁端部は肥厚しておさめる。底部は糸切り痕が残る。107 は口径 27.3 cm、高さ 10.5 cm、底径 10.6 cm である。107 も体部は斜め上方に延びるが、口縁端部は上方につまみあげる。

緑釉陶器には椀がある。108 は椀の平底の底部である。底径 7.0 cm、残存高 2.4 cm である。内外面ともに濃緑色の釉が施されている。内面にトチン痕がみられる。

土坑 13 (図版 7、図 17 109) 土師器、須恵器、緑釉陶器がある。京都Ⅲ期新～Ⅳ期中に属する。

底部外面に墨書がみられた須恵器皿 (109) を図示した。109 は須恵器皿の底部で、底径 6.0 cm、残存高 1.1 cm である。体部は斜め上方に延びる。内外面ともにナデ調整を施す。底部外面には墨書がみられるが、判読不明である。

### (3) 瓦類 (図版 8、図 18)

1・2 区含めて瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。平安時代から鎌倉時代の軒瓦が 11 点ある。図示できた 9 点について概述する。

瓦 1 単弁蓮華文軒丸瓦である。弁は盛り上がり、外区には珠文が巡る。瓦当部裏面の上部には丸瓦を挿入する浅い溝がみられる。側面と裏面はナデにより調整している。胎土は粗い。平安時代前期。1 区土坑 183 から出土した。

瓦 2 複弁四弁蓮華文軒丸瓦である。中房は半球状で圏線が巡る。子葉は盛り上がる。間弁は撥形である。一本造りである。平安時代中期。1 区土坑 120 から出土した。

瓦 3 瓦 2 と同文である。瓦当裏面に布目痕が残存する。平安時代中期。1 区土坑 197 から出土した。

瓦 4 巴文軒丸瓦である。外区に大粒の珠文が密に巡る。丸瓦凹面に布目痕が残存する。平安時代後期。1 区土坑 176 から出土した。

瓦 5 唐草文軒平瓦である。唐草文は両側に 3 転する。主葉は連続して大きく反転し、枝葉は巻き込む。外区は珠文が密に巡る。曲線顎。瓦当部凹面は欠損のため不明、凸面は横ケズリで調整している。平安時代前期。芝本瓦窯産。1 区土坑 211 から出土した。

瓦 6 唐草文軒平瓦である。唐草文は両側に展開する。外区は珠文が巡る。曲線顎。顎部凸面はケズリ。平安時代前期。1 区土坑 221 から出土した。

瓦 7 唐草文軒平瓦である。唐草の主葉・枝葉共に大きく巻き込む。外区は大粒の珠文が密に巡る。曲線顎。瓦当部凹面は横ケズリ、顎部凸面・裏面は横ナデを施す。平瓦部は凸面はナデ、

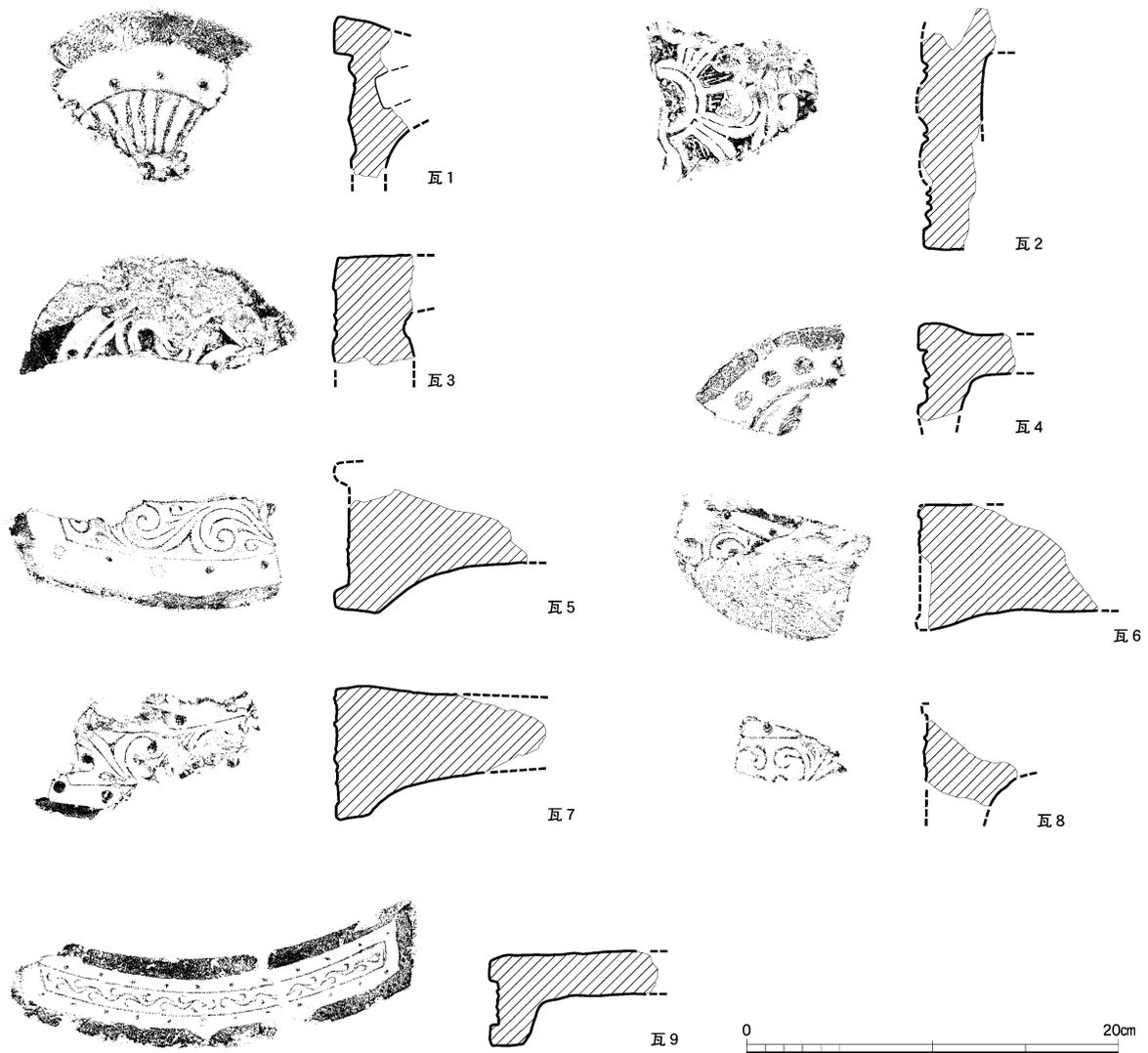


図18 軒瓦拓影・実測図（1：4）

凹面は布目、側面はケズリ。平安時代前期。上庄田瓦窯産。2区土坑22から出土した。

瓦8 唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字形で、唐草文が両側に展開する。外区は珠文が巡る。曲線顎。成形・調整は不明である。平安時代前期。西賀茂瓦窯産。1区土坑188から出土した。

瓦9 唐草文軒平瓦である。中心から両側に唐草文が10転する。主葉は連続して緩やかに反転し、枝葉は巻き込む。外区は珠文が密に巡る。曲線顎。瓦当部は平瓦凸面に粘土を貼り付ける。瓦当部凹面は布目、凸面はナデで調整する。鎌倉時代。1区土坑8から出土した。

#### （4）その他の遺物

土器・陶磁器類や瓦類以外では金属製品・石製品などがある。以下に主要なものについて概述する。

金属製品（図版7、図19） 金属製品には刀子や釘、棒状製品などの鉄製品がある。大半が平安

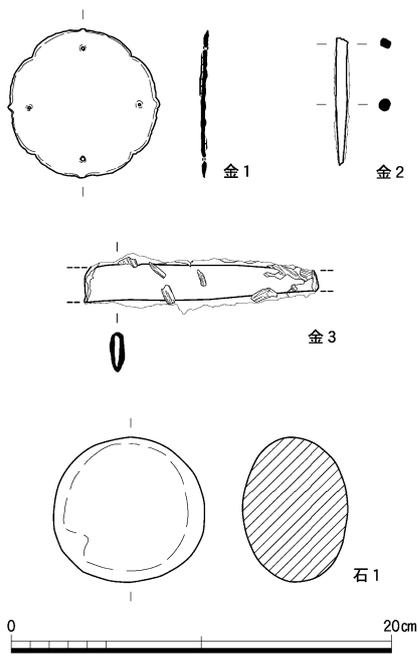


図19 金属製品・石製品実測図（1：4）

時代中期の土坑群から出土している。ここでは全体の形態がわかるものを図示して掲載した。

金1 鉄製の円板で、径7.9 cm、幅8.0 cm、厚さ0.2 cm、重量48.9 gである。4箇所にはほぼ等間に釘孔を開けている。周縁には四稜を施す。表・裏ともに錆化が著しいが、形態や重量から飾り金具とみられる。1区土坑189から出土した。

金2 断面が円形の棒状製品である。残存長6.8 cm、幅0.65 cm、厚さ0.65 cm、重量6.15 gである。用途は不明である。1区土坑189から上述した鉄製円板（金1）と共に出土した。

金3 刀子の先端部である。残存長12.3 cm、幅3.2 cm、厚さ0.8 cm、重量45.7 gである。表面に鞘の一部とみられる木質がわずかに残る。1区土坑224から出土した。

石製品（図版7、図19）石製品には砥石、磨石がある。

石1 楕円形の磨石である。長さ7.95 cm、幅7.65 cm、厚さ5.5 cm、重量460 gである。表面に平滑な加工痕跡がみられる。材質は砂岩系である。1区土坑224から出土した。

### （5）自然遺物（図20～22、表4）

廃棄土坑群については、いずれも平安時代中期の土師器皿や緑釉陶器などが多量に廃棄されていた。土器類とは別に1区土坑183・8・188の埋土には炭化物や焼土などが多く含まれていた。また、1区土坑183・221、2区土坑22からは炭化材がみられたことから、廃棄原因や周辺地の植栽状況などを知るため土壌分析を行った。以下に分析結果を要約しておく。

#### 土サンプルの分析

1区の土坑183・土坑8・土坑188の土サンプルを採取し、洗浄・選別した。土坑183の1～7層の各層（図8参照）、土坑8・土坑188の合計9サンプル（約200～400cc）を分析した。結果として、土坑183は5層から炭化マメ類（1個）と7層から炭化カキノキ属種子（1個）、土坑8からアカザ属種子（1個）を検出した。

#### 炭化木材の分析



図20 種実



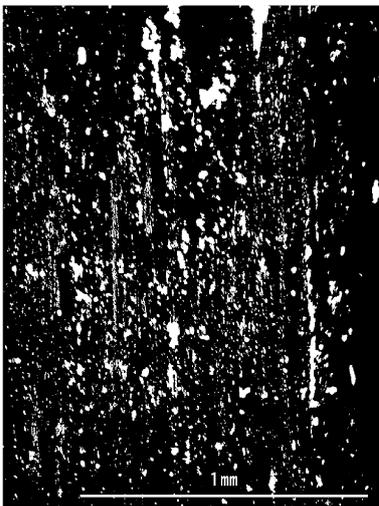
アカガシ亜属 (板目)



同 (柁目)



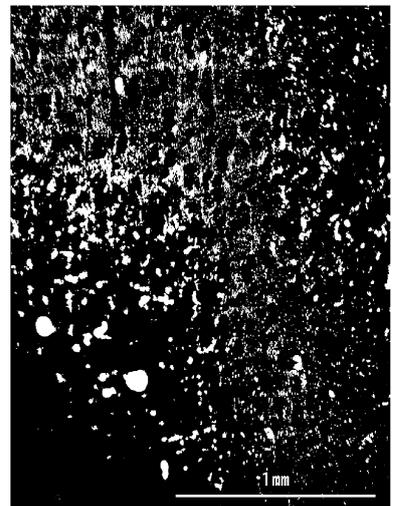
同 (木口)



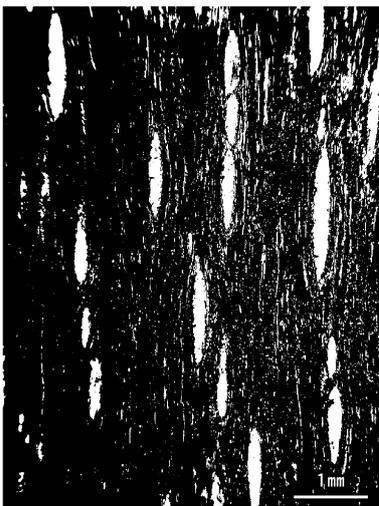
散孔材 A (板目)



同 (柁目)



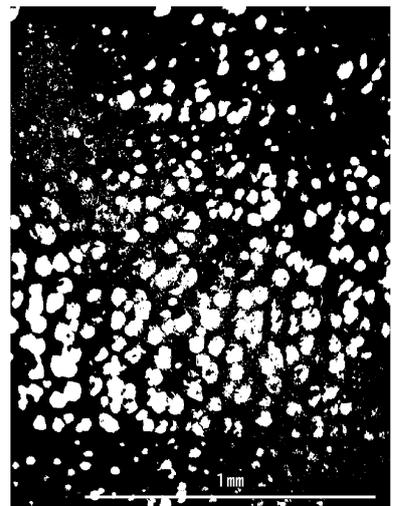
同 (木口)



散孔材 B (板目)



同 (柁目)



同 (木口)

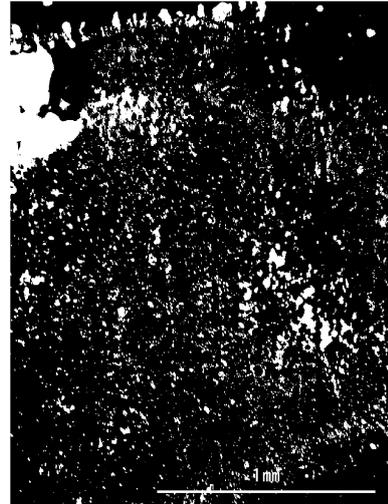
図 21 炭化材 1



散孔材 C (板目)



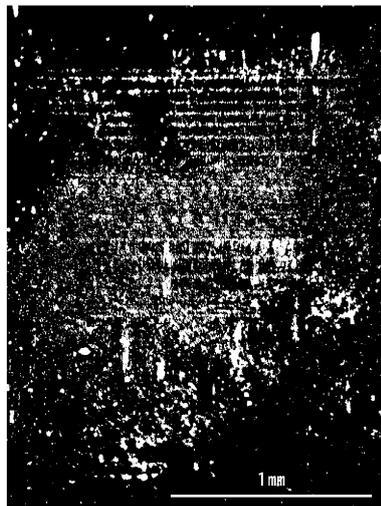
同 (柱目)



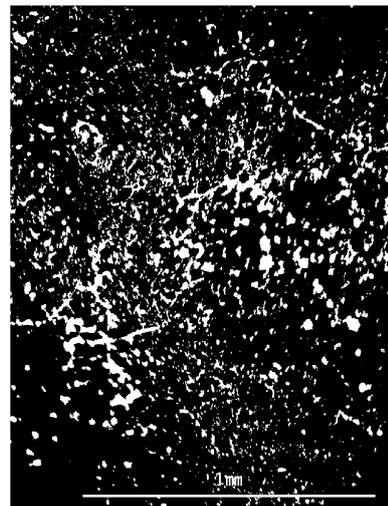
同 (木口)



散孔材 D (板目)



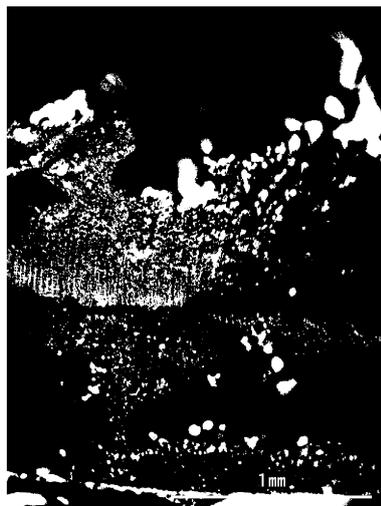
同 (柱目)



同 (木口)



針葉樹 (柱目)



同 (木口)

图 22 炭化材 2

表4 炭化材・種実リスト

地区	遺構	層	炭化材樹種	炭化種実	種実
1区	土坑183	3層	アカガシ亜属・針葉樹		
		4層	アカガシ亜属・散孔材C		
		5層		マメ類	
		7層	アカガシ亜属・散孔材D	カキノキ属	
	土坑8				アカザ属
	土坑221		アカガシ亜属		
2区	土坑22	上層	散孔材A・散孔材B		

1区は土坑183・221、2区は土坑22から出土した炭化木材の樹種を同定した。1区は全てにアカガシ亜属が含まれていた。他は散孔材2種類と針葉樹だった。2区は散孔材2種類だけであった。アカガシ亜属と散孔材は材の径が小さく、小径木か枝が炭化したものと思われる。針葉樹は焼土の中に混在し、細かい断片になり年輪で剥離し薄片化していた。

分析の結果、土坑183や土坑221からはマメ類やカキノキ属の種実とアカガシ亜属の樹種が同定された。いずれも炭化しており、近接地で燃焼した残滓とみられる。炭化材は樹種構成が同一の小径木であることから燃料材として考えられ、火を利用した儀礼や祭祀にかかわる可能性が高いが、この点については周辺の調査例との比較検討が今後の課題とされる。

## 5. まとめ

今回の調査では、広隆寺旧境内に関連すると考える平安時代中期の区画を示す溝・柵、遺物がまとまって廃棄された土坑群などを検出した。以下、それらの成果について要約する。

**区画施設** 溝2と溝15は、溝方位および出土遺物からL字形に曲がる一連の溝と考える。柵36が溝15と近接して平行に検出されたことにより、このL字溝も、何らかの建物や敷地を区画する施設と考えることができよう。また、今回の調査に先行して市文化財保護課が行った試掘調査2-1では、平安時代中期の南北溝を確認している。時期や規模から同一の区画溝と考えられる。それらの溝や柵を図示(図23)して、方形区画の北半部を推定した。方形区画の東西幅は溝の内側で37mとなる。広隆寺旧境内に存在した別院などの敷地の区画を示す施設の可能性がある。

**廃棄土坑群** 1区では土坑183、土坑224などを中心に複数の土坑を重複する状態で検出した。上述した区画施設、出土遺物から、これらの土坑群の特徴や性格をまとめておく。

これらの土坑は土器類を多量に含む点、埋土に炭や焼土を含む点で共通する。また、同じ場所に何度も掘り直されている。以上により、これらは不要になった土器類などを捨てた廃棄土坑と考える。この土坑群のすぐ北には上記の区画溝2があるので、この溝で区画された敷地の北端に廃棄土坑が一定期間、設けられていたと考えられよう。また、2区で検出した土坑22も同様の遺構である。これらの土坑からの出土遺物には、通常の器形のほかに二彩陶器や六器様の緑釉碗や花瓶など、明らかに仏器と思われるものが含まれている。したがって、寺院施設内の廃棄用に設けられた土坑と考えられよう。

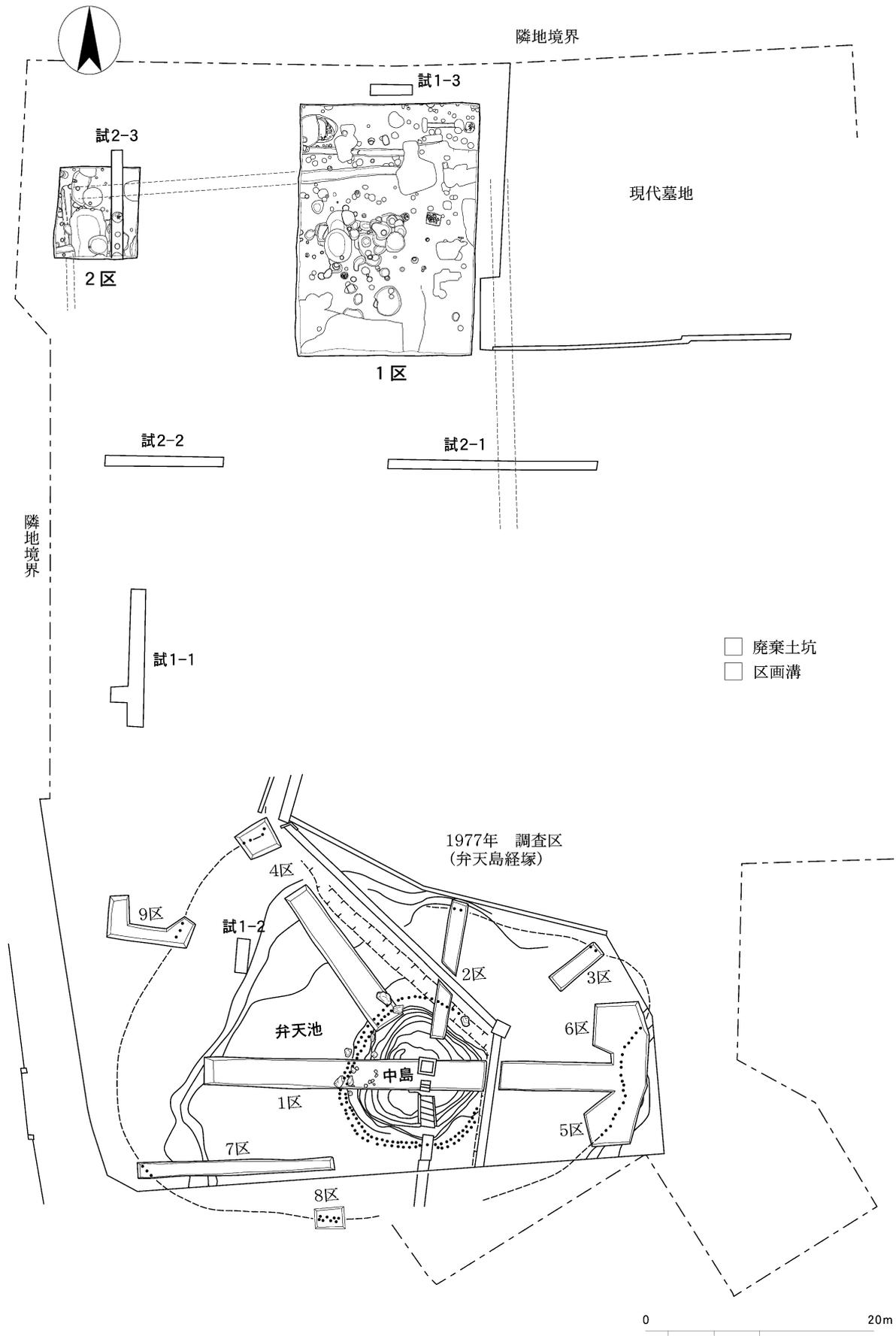


図 23 周辺調査と遺構概略図 (1 : 500)

なお、土坑 189 は、区画溝の北側に位置しており、区画外になる。土坑の東肩口に土師器皿、緑釉陶器椀・三足火舎と鉄製円板・棒状製品などが置かれたような状態で出土しており、儀礼に直接かかわる遺構の可能性はある。

墓坑 1 区で検出した集石 73 は埋土に礫が詰まる点、礫の下部に土師器皿の埋納がある点、鉄釘が出土していることなどから、墓の可能性を指摘できる。また、2 区で検出した土坑 13・25 も平面形が円形であること、集石がないことを除けば、集石 73 と同様の特徴を有する遺構であり、こちらも墓の可能性はある。

出土遺物 廃棄土坑群から出土した遺物は 11 世紀前半～後半に比定されるが、9 世紀代のものも混入している。11 世紀前半～後半の一群は、平安京内での出土内容と類似しているが、土師器皿が多量に含まれることが特徴である。土師器皿の多くは口縁部や内面に油煙が付着していることから、多くが灯明皿として使われたもので、仏前や僧坊などで使用されたと考えられる。また二彩陶器をはじめとして緑釉陶器椀・皿や花瓶そして灰釉陶器椀、黒色土器椀・皿や白色土器皿などは仏具として使われた可能性が高い。また、須恵器鉢や土師器鉢などの大型土器に底部中央を穿孔したものや、底部外面に突帯が巡るものなど特異な器形がみられ、儀式との関連で注目される。

緑釉陶器は椀・皿に近江産のものが比較的多くを占める。平安時代中期から中世にかけて広隆寺領荘園については、資材帳の記載から近江国を中心に経営され、とくに蒲生庄や犬上庄など緑釉陶器の生産地<sup>3)</sup>が含まれる地域などが散見され、貢納関係が窺われ、興味深い。<sup>4)</sup>

以上により、今回の調査地は、広隆寺旧境内の一面にあって、平安時代中期末より後期にかけて、宗教行事や祭儀などが活発に行われたことを窺わせる資料を得ることができた。他方、飛鳥・奈良時代や調査区の南約 50 m に位置する平安時代後期の弁天島経塚群<sup>5)</sup>に関連する直接的な資料は得ることができず、それらの課題が残された。

#### 註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第 8 版】』京都市文化市民局 2007 年
- 2) 註 1 に同じ
- 3) 『近江出土の施釉陶器』滋賀県風土記の丘資料館 1986 年
- 4) 清滝淑夫「広隆寺の成立に就いて」『南都仏教 第 14 号』南都仏教研究会 1963 年
- 5) 「広隆寺旧境内・弁天島経塚群」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 14 冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997 年



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわなかのちょういせき・こうりゅうじきゅうけいだい							
書名	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-4							
編著者名	加納敬二							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡 こうりゅうじきゅうけいだい 広隆寺旧境内	きょうとしゅうきょうく 京都市右京区 うずまさひがしほちおかちょう 太秦東蜂岡町 ほか 5他	26100	908  911	35度 00分 55秒	135度 42分 29秒	2010年5月 6日～2010 年6月22日	約400m <sup>2</sup>	園舎新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
常盤仲之町遺跡  広隆寺旧境内	集落跡	平安時代中期 ～後期	土坑、溝、柱穴、 柱列、柵		土師器、須恵器、黒色 土器、白色土器、緑釉 陶器、灰釉陶器、瓦器、 輸入陶磁器、二彩陶器、 瓦、金属製品、石製品			
	寺院跡	中世～近世	土坑、溝、柱列		土師器、陶磁器、瓦器、 瓦			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-4  
常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

発行日 2010年8月31日

編集

発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961